状況の中で

三年　組　氏名

集落の再建　遠い足音

広島市安芸区に住む高取雅彦さん（六〇）は自宅そばで動かなくなった軽トラックの前に立ち、静かに手を合わせた。兄の良治さん（六七）は市原地区で犠牲になった死者三人の一人。七月六日夜、このトラックのそばで避難の準備をしていたときに濁流に飲み込まれ、遺体は約二キロ離れたダムで発見された。「兄貴とは近くの川にカニやウナギを一緒に取りに行った。八月に孫と一緒に遊びに行く予定だったのに、言葉が出ない。」と涙ぐんだ。

広島県呉市の山あいにある二十四世帯、約五十人の市原地区は大量の土砂にのみ込まれ、住民三人が犠牲になった。約三週間にわたった孤立状態は七月末に解消されたが、ボランティアは足りず、土砂の撤去もままならない。集落の再建が危ぶまれている。

「毎年この日は黙とうをささげてきたのに、今年はそれどこじゃなかった。生まれて育った『村』がなくなってしまったから。先祖には申し訳ないんじゃけど。」

広島が七十三回目の原爆の日を迎えたこの日、市原地区にある自宅を片付けにきた森川和幸さん（七四）は深いため息をついた。

豪雨発生直後、同居の妻、次男と近くの避難所に駆け込み九死に一生を得た。今も避難所での生活を強いられているが、毎日のように自宅に足を運ぶ。

「命があっただけええ。そう思うしかない。」と自分に言い聞かせている。

だが、森川さんは「集落がもとの状態に戻るのは十年、十五年かかるんじゃないか。二次災害も怖いし、ここにはもう住めんです。水害の保険にも入っていないし、国からの支援金もわずかばかり…。オリンピックの開催よりも復興事業の方が先ではなかろうか……。」と心の声を漏らし、この地区を離れることを考えている。

ふとん店「アカマツ寝装」も、改築したばかりの店舗と倉庫が浸水し、全商品を処分した。店主の赤松光輝さん（三三）は「被害は一千万以上に及ぶ。このままだと家族が路頭に迷うことになる。子どもも生まれ、店舗も改築したばかりなのに。もうどうにでもなってくれ。我々は国に頼ってはいけないのだろうか。」とうつむきながら話す。途方に明け暮れた赤松さんは気力を失い、現実から目をそらそうと、これまで飲むことのなかったお酒にひたる毎日を送っているという。

頼みの綱である自衛隊は人命救助を最優先に活動するため、土砂の撤去や環境の整備は、わずか五十人弱の住民で活動しなければならないという現状である。

朝日新聞（２０１８・８・６）